

佐久弁（長野県佐久地方の方言）と私

篠 澤 明 剛

私は昭和30年代に佐久市岩村田の篠澤家(佐久ホテル)の長男として誕生しました。普段から明治生まれの祖父母と接することが多く、生の「佐久弁」に触れてきました。我が家は、北信地方に親戚があり、東信と北信の言葉の違いを子供時代から感じることもありました。

さて、岩村田小学校5年生の時、担任の先生の影響で佐久弁を調べる事になりました。この先生は元兵士で、しかも生粋の佐久人です。日本の文化や地元の伝統などを非常に重視されていました。私は、祖父母から沢山の佐久弁を聞き取り、ノートにぎっしり書き、先生に報告したり、クラスで発表したりしました。こんなに楽しい勉強があるのかと強く感じました。

中学生になると、佐久の4つの小学校(4地区)から集まった仲間他たちと、学ばようになりました。夏になると、平根小学校出身の友達と昆虫採集に出かけました。カブトムシを発見した私は「おっガンリュウだに！」と言うと、平根の友達は「なにだい？ベンケイずら？」と笑いました。平根ではカブトムシは「ガンリュウ」ではなく「ベンケイ」と言うことに驚きました。次に私はノコギリクワガタを捕まえ、「ニセメンだおえ」と叫ぶと、今度は「なんだやヨシツネだに」と言われました。これまた、方言の違いに吃驚しました。私の住む岩村田と平根は数百メートルしか離れていないすぐ隣の地区でありながら、なんと言葉が違うのです。

やがて夏休みになり、川に魚を掬いに行きました。今度は高瀬小学校出身の友人と一緒に出掛けました。急流の滝壺でシマドジョウを捕獲し、「タキザッコがとれたぞ」と言うと、高瀬の友人は「これはキリメだに」と言いました。ここにも方言の違いがありました。岩村田も高瀬も同じ湯川の流域でありながら、魚名が異なるということも非常に新鮮に感じました。

私は中学卒業後に岩村田の高校に私は進学しました。同級生には上田地区出身者が何名おり、また言葉の違いを感じました。佐久では「くすぐる」ことを「ももかす」と言い、「くすぐったい」は「ももっけえ」ですが、上田の友人は「聞いたこともない」と言っていました。それに佐久弁の語尾の「ごあす」、「ごあした」も違和感があると言われ、驚きました。

その後、私は京都や東京などに進学し、またまた様々な言葉に触れることになりました。同時に故郷の言葉が何よりも愛おしく感じました。

やがて故郷の佐久に戻り、佐久ホテルで働くようになりました。佐久ホテルでは、お客様のお食事の時にランチョンマットに似た「敷紙」という紙をテーブルなどに敷きます。今までは水墨画や俳句などをこの紙に印刷しておりましたが、佐久弁の番付や佐久弁の情報などを書いたところ、非常にお客様の反応が良く、今や「方言敷紙」が佐久ホテルの定番になりました。

さて、私は26歳の時に、ある決断をしました。実は篠澤家は神職を代々行っていた時期があったので、私も神職の資格を拝受するために、神社に修行に行くことに決めました。神社では白衣白袴姿で、毎日10時間以上正座し、祭式や歴史や神話などを学びました。その中で祝詞(のりと)の勉強をすることになりました。祝詞とは神職が神前で奏上する祈りの文章です。祝詞は漢字だけを用い、奈良・平安時代の文体や言葉を主に書き上げます。祝詞で用いる言葉は非常に特殊なものがあり、辞典やインターネットにも出てこない単語も大変に多くみられます。その中で、佐久弁とまったく同じ言葉もいくつかあることに気がつきました。

まず、「明い」(あかい)です。これは、「浄伎明伎正伎直伎心」(きよきあかきただしきなおきこころ)というように用いますが、「明き」は、「いつわりのない」という意味があります。佐久でも「あの婆やんの心は明いでごあす」などと言います。また祝詞では女性のことを「足弱」(あしよわ)と書くことがありますが、佐久弁でも女性性は足弱です。それから祝詞で「劣る」ことを「於曽伊」(おぞい)と言いますが、これも佐久弁と全く一緒です。一方、祝詞で葱を「辛菜」(からな)と言いますが、佐久でも葱は「からな」です。この他にも祝詞と佐久弁の一致はいくつかあります。

古い時代の日本語が神社の祝詞と佐久弁に残っているのは、とても神秘的に思えてなりませんでした。

また、神社では雅楽の勉強をさせて頂きました。譜面を覚えて声に出して歌う唱歌

(しょうが)というものを行います、譜面の「ハヒフヘホ」はなぜか「パピブペポ」と発音するのです。実はこれも古い時代の日本語だと知りました。

ところで、私は27歳で佐久青年会議所に入会しました。3年目には委員長を仰せつかり、佐久弁を調査したり、方言劇や方言紙芝居、方言劇などを披露しました。佐久青年会議所の歴史の中で、今まで方言に着目した事業を展開した人はいないとまで言われ、大変にやりがいのある企画でした。

ちょうどその時に、新幹線佐久平駅が開業し、駅構内に「FMさくだいら」というFMラジオ局が開局しました。局の企画として、青年会議所が地域の問題などを発信する「JCアワー」という番組がスタートしました。その番組の中に「方言の時間」というコーナーも始まりました。これは、私が「恋太郎」(こいたろう)という役で、鬼頭しずアナウンサーが「東京子」(あずまきょうこ)役で、会話をおもしろおかしく進めるものでした。

恋太郎は60歳の佐久の農夫で佐久弁しか話せないという設定で、東京子は東京出身の20歳の女性で方言をまったく知らないということになっておりました。当然両者は話が食い違ってしまい、周囲から笑われてしまうという内容でした。その後、FMさくだいらでは「恋太郎の方言講座」や「アカデミック恋太郎の方言講座」などを行いました。結局私は、FMで約10年佐久弁番組を行いました。週に3本の方言番組を行っていた時期もありましたが、楽しい思い出になりました。

当時、「FM方言番組」は珍しかったのでしょうか。私の出演するFM番組を取材するテレビ局や新聞社や雑誌社などが何社かありました。

ところでNHKテレビの「お元気ですか日本列島」という番組の言葉のコーナーに、ある視聴者から質問のお手紙が届いたそうです。そこには「負けず嫌いという言葉がありますが、「負ける嫌い」が正しいのではないですか」と書かれていたそうです。そこでNHKの「ことばおじさん」と言われて、親しまれていた梅津正樹アナウンサーは、私にわざわざ電話を下さいました。「以前NHKの番組で使用した篠澤さんの方言会話のVTRを使用させて下さい」とのことでしたので了承致しました。

梅津アナウンサーは、「佐久の方言では、言葉の最後に“ず”をつけて“しょう”という意味で用います。つまり、負けず嫌いの“ず”は、否定の“ず”ではなく、“しょう”という意味なのです。と番組内で解説されておりました。

それから方言に関するテレビ番組を通じて、信州大学の馬瀬先生とお会いさせて頂

くこともできました。また先生から大変に興味深いお話をお伺いする機会にも恵まれました。先生は、佐久弁でタンポポのことを「くじな」と言いますが、これは平安時代の言葉に由来するとのご指摘をされました。タンポポの葉は藤の葉に似ているので昔は「藤葉」(ふじな)と言っており、それが「くじな」に変化したのでしょうか。と話されておりました。それに佐久弁で、片足跳びを「シンガラ」といい、それは軽井沢に来た宣教師が「シングル」と言ったことに由来するという逸話がありますが、馬瀬先生は、「それはあり得ない」とおっしゃられておりました。

ところで、この他に外国語に由来すると思われる佐久弁もあります。

「すべたあま」(あばずれ女)の「すべた」はスペイン語の「スペタ」(あばずれ)であり、「あま」はサンスクリット語の「女性」に由来すると言われます。

それから、佐久では、「あかんべえ」を「めろんかん」と言います。韓国語でも「あかんべえ」は「めろんかん」ですので、これは偶然とは思えません。ちなみに佐久ではヤゴ(トンボの幼虫)も「めろんかん」と呼びます。これはヤゴが餌を食べる時に長い舌を出すから、またヤゴに指を齧られると舌を出すほど痛いから...など、様々な説があります。

さて、佐久弁には、その由来らしきものが伝わる言葉もありますので、ご紹介致します。

- ・「おじゅうこ」(生意気)は、昔、佐久の人が京都で公家の娘に面会し、「貴方は何歳ですか」と聞いたところ、娘は「御十五にございます」と話したそうです。自分の年に「御」をつけるとは生意気だと言うことで「おじゅうこ」になったそうです。
- ・佐久では結婚のことを「むかさり」と言いますが、これは「向去(むこさり)つまり、結婚は向う(あの世)に去るくらい、重要な儀礼であって、当然実家に戻ってくることは、できないという意味を含むそうです。
- ・「けんちん汁」を佐久では「けんちん汁」と呼びます。これは鎌倉の建長寺で誕生した料理だから「建長汁」が「けんちん汁」になったとか。
- ・佐久弁で大工を「ばっちょ」と言います。これは「番匠」(ばんしょう)すなわち、京都御所の「当番大工」から出た言葉だそうです。
- ・「おてんぼ」(役立たず)は、御天保(おてんぼ)すなわち天保銭のこと。この貨幣は明治初年にも流通したものの、実際より安く扱われたためだと言われております。
- ・佐久弁の「ほまち」(へそくり)は、「帆待」であり、船乗りが、帆を出しての出航

ができずに、陸地で待っている間に金を貯めたことに由来するといわれます。

- ・「へこ」は佐久でアリジゴクという虫のことです。この虫は、牛のような角があるので、東北弁などのベコ（牛）がへこに変化したそうです。
- ・佐久ではサツマイモを「まるじゅう」と呼びますが、これは薩摩藩の紋所が「丸に十」だからといわれます。
- ・一方、ジャガイモを佐久地方では「さんとく」と呼びます。ジャガイモは年に3回収穫することも可能なので「三得」ということです。
- ・佐久では排便行為を「ギジブツ」と言いますが、キジ（野鳥）を鉄砲で撃つ姿勢に似ているからだそうです。
- ・佐久弁で「にどぼこ」は痴呆のことです。二度目のぼこ（赤ちゃん）という意味で、痴呆老人を「赤ちゃんみたいだ」と考えたのでしょう。
- ・「まめぞう」は「おしゃべり者」のことです。幕末から明治にかけて「豆蔵」と言うおしゃべり芸人がいたそうです。

ところで、古典落語の中にも、佐久弁と同じ言葉がたくさん登場します。

その一部は次の通りです。

- ・めえる（見える）
- ・かみすり（かみそり）
- ・つをい（強い）
- ・ふるしき（ふるしき）
- ・まみえ（まゆげ）
- ・あずぶ（遊ぶ）
- ・ほきだす（吐き出す）
- ・てのごえ（てぬぐい）
- ・まつつぐ（まっすぐ）
- ・いってさんじ（行ってきます）
- ・おてしょ（小皿）
- ・さくい（きさく）
- ・わにる（はにかむ）
- ・しんねこ（親密な男女）
- ・たしねえ（貴重な）

・しほ(ひも)

それから古典落語の中で「かんしょうれ」(瘦せた人)という表現があります。これも佐久弁と一致しますが、「かんしょうれ」については辞書やインターネットで調べても出てきません。どのような言葉なのか、今後調査してみたいです。

さて、江戸の小噺にも佐久弁と同じ言葉が沢山あります。『天女が羽衣を男に盗まれてしまいました。男は、「俺と夫婦になれば羽衣を返してやる」と言います。天女は、「承知しました。それでは羽衣を返して下さい」と願いました。男が羽衣を返したところ、天女は羽衣をまとい、空に逃げて行きました、男は「なぜだ」と絶叫しますが、天女は「そらことだよ」と笑いました』というものです。佐久弁でも、嘘のことを「そらこと」と言います。

また、こんな小噺もあります。「お前さんどこ行くんだい?」「どンドン歩けば墓行くさ」という短いものです。「はかいく」とは、「はかどる」という意味です。佐久でも、「はかいく」(はかどる)という方言を用います。他にも紹介したい佐久弁が山ほどありますが、今回はここまでとさせていただきます。

ところで、佐久ホテルには明治時代に島崎藤村が何度も来館されております。島崎藤村は、「故郷は血と言葉に繋がっている」と言われております。この「言葉」とは当然、方言のことでしょう。「故郷」「血」「言葉」こそ故郷の奥底に流れる重要な魂なのだと思います。

これからも方言を見つめ、また言葉を愛し、継承していきたいと思っております。

【番外】

佐久弁で語る桃太郎

はあるかセンのズデむかし、ジャンとバヤンが住んどりやした。

ジャンは山せコサキリせ、バヤンは川せ、センタクせ、えきやした。

ええかんすりゃあバヤンとこせホロテが流がれて来やした。

バヤンは「なりずももかや?しよろってかずい!」と家せ帰えりやした。

ホロテよマネエタの上せエッケテ、ほうちよで切らっとむいやした。

とんぼに「おぎゃあ!おぎゃあ!」とコボがすつとび出て来たでござす。

ジャン、バヤンはこのアカに「桃太郎」と名メエを付けたただよ。

桃太郎はウノガテにステデッカクなりやして「ジャン!バヤン

おかたじけでやした。

おら鬼ヶ島せエツてえぶせってえ鬼よコナシツケテきやす。」

つつてジヤン、バヤンにきび団子よコシャツてもれえやした。

「さいな！えってさんじや」つう具ええに桃太郎はエンデきやした。

しとっきらするとモコウからエノとインコウとギジが

でっでとノシテ来たてごあす。

エノは「桃太郎さぁオラにきび団子よオコンナンショ」つついやした。

インコウも「おらカマケルにきび団子アタクサおくんなすって」

つつただと。そいでもギジも「おらホンコにやるにカテとこなせえ」

つついやした。桃太郎は「イコよばれたいだらウナトウいじゃ！」

まさかっちゃあ、つをいショウがよさったてごあす。

みんなしてアンケラコンケラよのしさエンデ鬼ヶ島せ着つきやした。

桃太郎とうは、ばんてこうちに鬼よオイコクツて、ささらほうさら

エンメやした。ギジは鬼のメダクダマせ、エノはホダッボせ、

インコウはセツベタよタメてシガラモナクしんどづきやした。

まさかあ鬼もモオロツケエシテ「すけとこんなんしょ～

すけとこんなんしょ」、「かんしな、かんしな」とへちよへちよべちよよ

かきだしやした。桃太郎さんトウは鬼よエスカにコッパラカシテ

たしねえお宝よモウゾウがめて来たただとさ。こんでオシメエてごあす。

めでてえだいや。